

捕獲の担い手の心身ケア手法の開発

(本研究は 宇都宮大学「ヒトを対象とした研究に関する倫理審査」において承認を受けて実施した。)

要 約

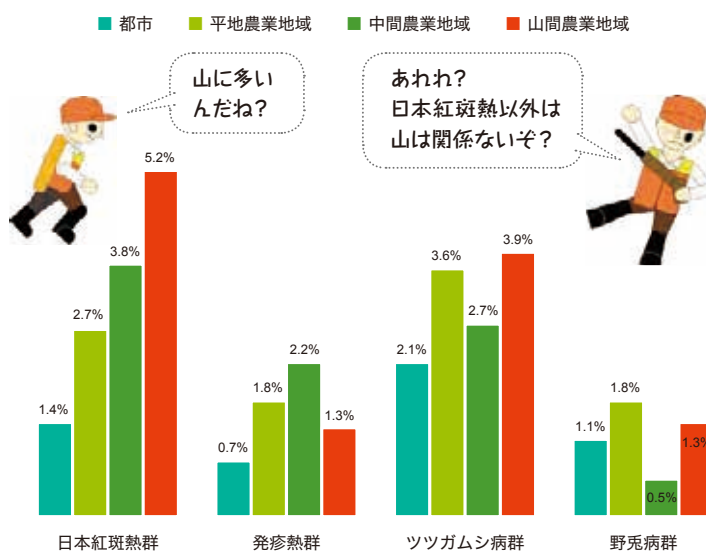
野生動物捕獲事業では、人獣共通感染症に対する感染リスクなど山での捕獲作業上の健康管理について言及されたことはあまり多くなかった。そこでマダニ感染症に注目してその感染リスク評価をおこなった。またジビエ利用などにおいて、捕獲の担い手が正しく認識して、労働衛生上の問題を洗い出した。更にこれらの結果より対策として、「マダニ対策リーフレット」や医療者との連携を形成する「野生鳥獣等取扱者手帳」を作成した。

ダニ感染症は“西高東低”ではない！

表 1 県別の抗体保有率

県名	検査数 (人)	陽性数 (人)	保有率
岩手	60	5	8
福島	94	1	1%
栃木	217	27	12%
山梨	13	1	8%
岐阜	24	2	8%
三重	98	6	6%
和歌山	128	5	4%
兵庫	61	1	2%
島根	258	25	10%
佐賀	92	9	10%
長崎	57	9	16%
沖縄	26	nd	nd
その他 (10)	24	2	8%
Total	1152	93	8%

居住地域と各感染症に対する抗体保有率の関係



野生動物の狩猟や捕獲や防除を実施している担当者や周辺住民を対象に、全国でダニ媒介性感染症に対する抗体調査を実施してきた。その結果、栃木県および長崎県が他県に比べて抗体陽性率が高かったことが判った。また、ダニ媒介性感染症の問題は、西日本に多いと医療関係者を含めて多くの人に信じられているが、東日本と西日本で差はないことが判った。

表 2 一般化線形モデル解析の結果

anti-pathogen	説明変数	係数	オッズ
日本紅斑熱	都市地域	-0.664	0.52
	平地農業地域	0.000	1.00
	中間農業地域	0.353	1.42
	山間農業地域	0.667	1.95
発疹熱	年齢	0.052	1.05
ツツガムシ病	年齢	-0.017	0.98
野兔病	性別 (男性)	-1.184	0.31

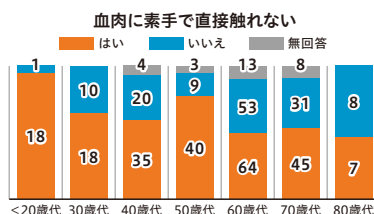
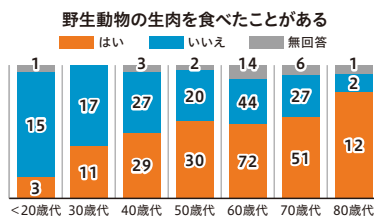
日本紅斑熱は山に向かう方向で感染者が増えていた。日本紅斑熱以外の感染症については、一般化線形モデル解析によって、野兔病については、男性よりも女性に多くみられることが判った。発疹熱は年齢が上がるにつれて、一方ツツガムシ病は年齢が下がるにつれて上昇する傾向がみられた。



担い手は労働衛生的な安全意識を持っているか

2017年1月から2018年2月の間で、岩手、栃木、岐阜、三重、和歌山、兵庫、島根、佐賀及び長崎において、担い手387名に野生肉利用の安全管理に関するアンケート調査を行った。二択回答選択の設問が9項目、及び自由記述が1項あった。

設問	Yes (人)	No (人)
食品加工に関わる職経験ある	61	283
技術指導者がいる	120	220
技術継承者がいる	38	300
野生動物の生肉を食べたことがある	210	155
血肉に素手で直接触れない	230	134
野生肉は畜肉より安全だと思う	50	312
安全対策(マニュアルなど)がある	96	220
仲間で安全管理確認する	170	144
安全講習会を受講したことがある	136	177



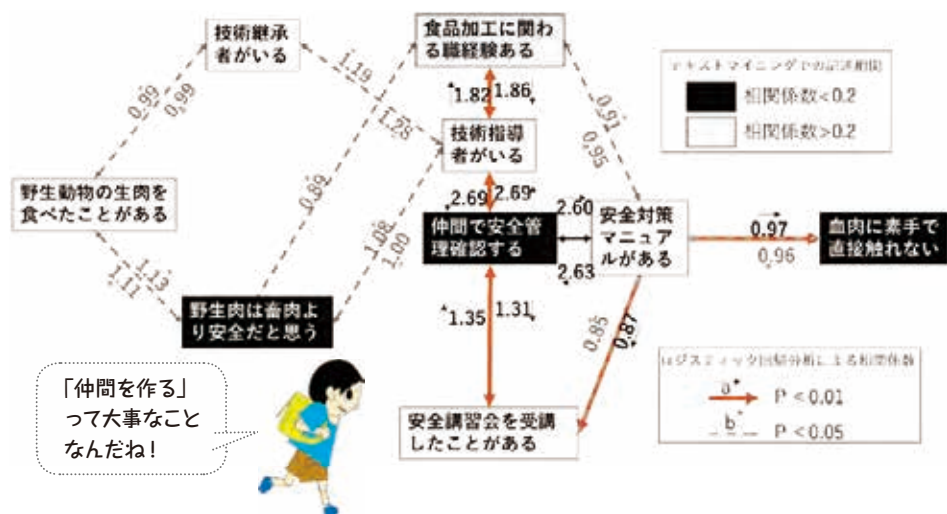
病原体だらけなのに刺身(生肉)や「炙り」で食べるなんて!! キモい!



アンケート結果、安全管理を仲間で確認する、講習を受けるという人は約半数だったが、安全マニュアルの作成はされていない。

若い世代になるにつれて生肉を食べない、血肉を直接触らない等の衛生意識が変化してきている事が分かった。

アンケートの世代別の傾向と自由記述内容から分析すると、安全マニュアルを作成するためには、仲間で安全管理を行う必要があることが判った。その一方、仲間で安全確認する人としていない人は、自由記述に書いている内容が異なっていた。



対策としての啓発

発言の異なる人つまり考え方の異なる人に対して、安全意識を改善するためには、科学的な根拠を持った指導と、医療現場との連携が必要である。そこで、正しく且つ実施可能な対策を啓発するために、マダニ対策リーフレットを作成して配布した。また、担い手と医療関係者との連携を生み出す為に、母子手帳を参考にして、「野生鳥獣等取扱者手帳」を作成配布した。



まとめ

獣害作業は、人獣共通感染症のリスクと捕獲道具による事故リスクがあるにも関わらず、担い手の安全意識を高めるための啓発ができていなかった。また地域の医療関係者との連携もまた必要であり、開発したリーフレットや手帳がこれらの問題を解決する一助となることを期待する。